

『黄帝内経』にみる

中国伝統の身体観

明治大学 富 燦霞

目的と方法

本研究の目的は、伝統戯曲の技法表現から中国舞踊における伝統の身体観を探り、構築することである。本発表では中国伝統身体観の研究で高く評価されている石田秀実(日本)と蔡璧名(台湾)両氏(以下敬称略)の論点を通して、伝統中医学の経典である『黄帝内経』(2011年ユネスコ世界記憶遺産認定)にみえる古代中国人の身体意識と、伝統戯曲の技法を形成する思想背景との関係を探る。

『黄帝内経』にみられる伝統中国の身体観

中国人は伝統的に陰陽五行を通して世界を解釈し理解するという考えを持っており、伝統中医学もこの陰陽五行論を土台として築かれている。

石田は「人の身体の中で、「こころ」が具体的にどのように現われ、人の行動とどのように関わることなのか、をいわば生理的な根拠のうえから探つ」(石田1987, p.97)た。解剖を基礎とした西洋医学の身体への認識とは異なり、中国医学では解剖される肉体は死体であり、生きている身体とは異なるものとして捉えられる。中国人は、解剖で見える肉体の身体組織を「場ないし空間としての身体」、生きている身体組織の中に流れる気血を「流体としての身体」として認識し、二つの身体のうち、後者が生きている生命にとってより本質的なものと見る。五臓には五行の気が生じて宿り、精神としての「こころ」は気血(流体としての身体)とともに体中に巡って広がり充ちる。また、風の病因論を例に挙げ、治病における陰陽補瀉の考え方から、体内の気と大自然の気との相関関係の見方を解釈した。

蔡は、中国における「身体」概念として、外の形(肉体)と内の神(精神)の両面が挙げられるという。生命の根源は神であり、身体内部に宿る神が働いていることで生が続き、神が形から去ると精神・意識も停止する。一方、形のある肉体はその性質や色などが自然環境の気という外在的な影響を受けている。気は自然万物の形を構成する基礎であり、気が去ると肉体の代謝機能・生氣も停止する。神は形に内在する生命現象の根源であるのに対して、形は神が宿り生命現象を営み続けるための器である。伝統中医学は、自然が人

体にどのような影響をもたらすかを、空間(居住環境)の検証と時間(四季)の測定から判断する。体内の気血は四季の推移とともに変化し、時間的周期(1日、1ヶ月、1年)から類比・分析されるという周期性の探求は、自然と人体の変化が互いに対応しているだけでなく、自然と人体の法則において一定の内在的な連繋があると考えられている。気はその連繋役を担い、門戸(鍼灸のツボ)を通して身体の内外を行き来するため、体内の変化が体表に現われ、外在の邪気(体にとって悪い気)が流入して体調を悪くすることもある。さらに臓腑の気を官僚制に象徴させ、身体を一つの組織的な運営体として健康状態を全体の流れから判断する。

そして両氏は、中国の伝統的身体観を考察するために、医学の分野だけでなく、儒家、道家、諸子百家の伝統思想からの引用にも基づいて、中医学の身体諸現象や見解を解釈している。さらに蔡は、『黄帝内経』が呈する身体観は、思想分野を問わず古代中国人の共通認識であると明言している(蔡2003, p.48)。

伝統的身体観と戯曲技法の形成

これまで、戯曲の表現技法にみる中国伝統の身体観について研究を進め、発表してきた。京劇の化粧においては、役柄の性格の特徴によって色が使い分けられているが、これは『黄帝内経』において五臓の気の存在状態が精神・感情・性格に影響し、五臓と五行と色とが固く結びついていることに対応している。また、戯曲の部位技法は、造形を強調する部分と円や曲線を強調して流れるような動きの部分という質の異なる二つの表現が組み合わさって一部位の表現を構成しているが、これは石田のいう二つの身体や、蔡のいう身体の二面から理解できる。

近年研究が進んできたことにより、哲学や医学における中国伝統の身体観の立場からの検証が可能になった。今日まで伝承されてきた戯曲の技法表現は、古代より抱かれてきた身体への共通認識を背景に形成されてきたと考えられる。

主要参考文献

石田秀実 1987『気・流れる身体』平河出版社。
—— 2004『気のコスモロジー』岩波書店。
蔡璧名 2003『身體與自然』國立臺灣大學文學院。
—— 2019『醫道同源:當老莊遇見黄帝内経』平安文化。

謝辞 本研究は JSPS 科研費 (JP19K00229) の助成を受けたものである。